

夕風の河口

梅原稜子



風の河口

梅原稜子

《著者略歴》

梅原稜子（うめはら・りょうこ。本名，松代智子）1942年10月4日，愛媛県八幡浜市に生まれる。早稲田大学国文科卒業後，中央公論社に勤務。1974年2月退社。作品集に『掌の光景』（1975年8月文藝春秋刊）がある。

夕風ゆうなげの河口かこう

一九七八年二月二五日第一刷印刷
一九七八年三月一〇日第一刷発行

著者 梅原稜子

発行者 堀内末男

発行者 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五～一〇 郵便番号一〇一
電話 東京三〇〇六三六一（出版部）二三〇六二七一（販売部）

印刷所 大文堂印刷株式会社

株式会社美松堂印刷所

定価 八八〇円

©1978 Ryoko UMEHARA, Printed in Japan

著者との了解により検印は廃止します

乱丁・落丁本等はお取り替えます 0093-772133-3041

目次

寄りそう石の群れ——5

山景を陸む——63

享ける日々——113

夕風の河口——165

装帧——山口はるみ

作品集

夕風の河口

寄りそう石の群れ

冷たいものに口許を塞がれた気がして目を覚ますと、列車は暗い海沿いを走っていた。砂浜との間にわずかの屋並が連なり、その屋根に車窓の明りが次々と白く零れ落ちていく。濃い潮の匂いを含んだ風が息苦しいほどだった。

向い合った座席の老人夫婦は、相変らず窓の外を眺めていた。背筋の伸びた体格のいい老人と、首の竦んだ瘦せた老女だった。老女の方は力のない目が時たまふっと揺れ、どこか上の空のふうに見えた。

「足、伸ばしなさんか、ここへ」

老女が座席の隙間を指して宗子に言った。

「ありがとうございます。どうぞ、こちらへも」

宗子も空いている横の席を示した。だが老女もそのままの姿勢だった。空いた車内はほとんど

の者が眠っており、頭上の扇風機は車輪の音に消されて羽音がしない。一年ぶりに会う妹の顔を思い浮かべて宗子は氣持が逸^{はな}った。

今のように帰省する時ではなく、四国の郷里から戻る時、彼女は妹の話し声に数度は出会う。訛の似た乗客の多い、初めの五、六時間のうちに限られていたが、中年の女であれ若い娘であれ、やや速口の、どこかが妹に似た声ならば、たちまち妹の声に変った。眠りかけている時とは限らず、宗子の知らない地名や人の名前も混じえて、振向けば妹の顔がそこにありそうなほどに、彼女の声になっている。幻聴というほどではなく、耳に残った妹の抑揚が、よく似た声によって増幅されるふうだった。母や亡くなった父や、あるいは身近な他人がそういう現われ方をしたことは一度もなかった。

黒い海のむこうに、ひとかたまりの明りが顯われた。島であるらしく、燈はあちこちにぼんやりと滲んで動かない。島からも陸の燈が見えるはずだった。無数に連なる、羨ましい燈だらうか。

午前中にこのあたりを通ると、車中からも波底の小石が透けて見えた。線路沿いの家は北側の海に面しており、その時刻、屋根は陽かげになっているが、海面は朝陽を浴びて輝ききっている。郷里から戻る時、宗子はそのあたりにさし掛ると、軽ろやかな気分がいつそう拡がった。

「立ちなさるかね」

老女が隣へそう尋ねていた。老人は足をステイム管に載せて、座席の下から靴を取り出し

た。ようやく履いたが紐がうまく結べない。

「ちょっとご免なさい」

宗子へ言つて、老女は座席の間で中腰になり、黄ばんだレースの夏手袋を外して、紐を結んだ。老人は背広を整えて立ち上り、座席の頭部の把手を伝わりながら、ひとりで洗面所へ行った。土産物なのだろう、頭上の網棚には、包装紙に関西のデパートの名が読める、同じ大きさの函が数個、紐で結えて載せてある。つま先がきつくなって、宗子も靴を脱ぎ、冷たいスチーム管へ足を載せた。

郷里の駅を発つ時、彼女はいつも気持が弾んだ。肉親の中で味わったぬくもりと、彼らから離れられる自由さを反芻した。そこへ関わらなくて済む自分の身を改めて思い、ほっとすることもあった。帰京してアパートへ近づいた時、留守にしていた数日間を数十日ほどに感じ、何か事故でもあったのではないかと、おそるおそる角を曲るくらいのは常だった。そして、部屋の明りをつけた瞬間には、ほんの一日だけ留守にしていたように感じたりする。もし達二が来るのがなくなっても、そうなのではあるまいか。郷里から戻った時ばかりでなく、自分の住み場所に對する、分身ほどの愛着と安堵は変らないのではあるまいか――。

「もうじきですよ」

戻ってきた老人を通路側に坐らせて、老女が言った。

「バスはもうありませんな。……やっばり、どこぞに泊まりませんか」

また言うのか、というふうに老人は顔を顰めただけだった。

「明日の朝、帰りましょう。まだ、少しは残ってますけん」

「要らんことに使わんでええ」

座席の腕凭せへ手を載せて、老人が低く答えた。

小駅にさし掛り、通過待ちの列車を抜いて行つた。そちらの車内は人影が数えられるほどで、がらんと明るい車輛の間に、郵便用らしい車輛が黒っぽく浮き出て過ぎた。宗子はふと、妹の浩子を東京駅で見送つた時のことを思い出した。

八年ほど前、彼女たちはしばらくふたりで暮していたことがある。宗子は学生で、二十歳の浩子は勤めていたが、八カ月間ほどの東京生活のあとで浩子は郷里へ歸つた。初冬のその夜、宗子は叔母とともに彼女を見送りに行つた。上京の時と同様、淋しい帰郷のし方だった。荷物を車内に置いて、カーテンの掛つた寝台車の外へ浩子が出て来ると、三人は寝台の位置とか二十時間掛る道中のこととか、列車に関することばかりを話題にした。浩子の氣持を引き立てるようなことを言うのは妙な慰めになりそうでもあつた。発車間近になつて宗子は、浩子の長いブーツに氣づいて、

「靴、替えた方がいいんじゃない？」

と、自分の履いている踵の低い靴をさし示した。これを履いて歸るのだと言つて前夜、ブーツを大事そうに磨いている時は何とも思わなかったが、長旅では不便だろう。ちょうど足の文数も

同じだった。

「東京の流行を皆に見せたいのよね」

叔母が笑って言った。

「寝台車の中もだけど、むこうへ渡ってからスティームで足が蒸れるわよ。あとで送ってあげるから」

「送るのも変やない？ 何かの形見みたいやない？」

「じゃ、暮れにわたしが履いて帰るから」

「ほな、そうするわ。お姉さん、取らんといてよ」

あわただしく靴を履き替えて、浩子は列車に飛び乗った。それで少しは賑やかな別れになったが、列車が動き出してからデッキにしばらく妹の顔があった。笑っていたがひとりになれば強ばってしまいそうな顔だった。一瞬、カーテンの掛った黒っぽい列車が、幌を被せた輸送車のようにも見えた。

気配を感じて、宗子は向いの者を見た。

老女の細い目から涙が零れていた。放心したように遠方をみつめている顔の中で、涙だけが静かに、次々と溢れていく。老人は腕凭せで頬杖をつき、掌の中で頬を歪めて、通路の奥を無然と見遣っていた。宗子は急いで視線を逸らせた。

「泣いても、かえって来やせん」

老人が声を抑えて言った。その言葉に衝かれたふうに老女はうっと喉を詰まらせ、膝の上の手袋を口に当てた。目の端で首の竦んだ肩が小刻みに震えていた。

「なんとですな。五十にもならんうちにようもまあ……。わたしらより先に、……可哀想に、なんとですな」

呻くように言つて両手で顔を押えた。再び、ハルオという名前を挟んで途切れ途切れに何か呟き始めたが、言葉は聞き取れない。小さな顔が両手の中にすっぽりと入り、俯いた頭に地肌が覗いていた。

「さあ、支度せい」

老人がハンカチを差し出した。老女は顔を拭い、口をぽかんと開け、急にあどけない表情になつて動こうとしない。老人が網棚から荷物を降ろし、宗子が手伝つた。

「済みませんな」

礼を言ふと、まだ誰も立ち上っていない通路を、ふたりはのろい足取りで去つていった。

都会で一家をもつた息子が亡くなつたのもあろうか。が、葬儀からの帰途にしては、親類の連れもおらず、土産物も妙である。彼らだけがしばらく残り、久しぶりに帰る郷里を前にして改めて辛い気持ちに襲われた、というようなことだろうか。しかし車内放送が次の停車駅を告げると、宗子はもう彼らのことを忘れた。

列車が明るいホームに入った。徐行する車内から宗子は目を凝らした。思わず声を挙げそうに

なったが、ホームの浩子を列車が追い抜いて行った。停車するや窓から身を乗り出し、二輛ほど後に立っている浩子へ手を振った。呼ぼうとした時、その山吹色のワンピースが人波に掻き消された。焦れたい思いで人波が退くのを待ち、大声で呼んだ。籐製の籠を振りながら、顔いっぱい微笑で浩子が駆けて来た。

「お帰りなさい」

「よく来てくれたわね」

立ったまま、宗子も高い声で言った。

「くたびれたでしょ？……空^すいてるんやね。ずっと坐れた？」

車内を見廻して、抑揚なく尋ねた。

「坐れたわ。……あら、ついてるわよ」

と宗子は自分の口許を指してみせた。剥げかかった桃色の口紅の上に、海苔がついている。

「鏡、持っとる？」

「網棚の鞆の中なの」

浩子は黙って顔をつき出し、宗子が唇の海苔を取った。

「勇ちゃんは？」

「うまいこと寝かしてきたわ。……あたしも乗ろうかしら。次まで行って、戻って来るわけにはいかんかしら」

半ば本氣のように言う。びったりと梳かしつけ、男の子のように短かく刈り上げた髪の下で、浩子の視線が弾み始めた。

「じゃ、はよお乗り」

「駅弁、食べれへんかったでしょう」

「食べたわ、連絡船の中で」

そう言った時、列車が大きくひと揺れして、浩子が飛びのいた。ややあって、また軽く揺れた。連結車輛の一部を外している様子だった。顔を見合わせて笑い、浩子が、

「これやからね、ここから先は乗ったら、なかなか帰れへんわ」

と、ホームの後部を眺め渡した。その駅から先は車輛の数も列車の本数も少なくなる。

浩子は、結婚をして以来、その小都市に住んでいる。会社勤めをしている夫の重則との間に、四歳になる息子がいた。父が元気だった頃は宗子は帰省するとよくその町で降り、浩子の家に一泊した。重則は宗子よりひとつ年上の婿養子で、お互いに気心が知れていた。老父母に迎えらるる婚期の遅れかかった娘、という図がどこか鬱陶しく、その前の小休止というつもりもあった。翌朝、宗子が帰り、休日があれば浩子たち三人も車で一時間ほど先の郷里の家へやって来る。宗子にとって重則は、新しく加わった気易い家族という感じで、いっしょに寝起きしたわずかの日に較べて、親しさがあった。

だがここ三年ほどはまっすぐに母の許へ帰っている。母と過ごす日が延べ日数にしてあと幾日